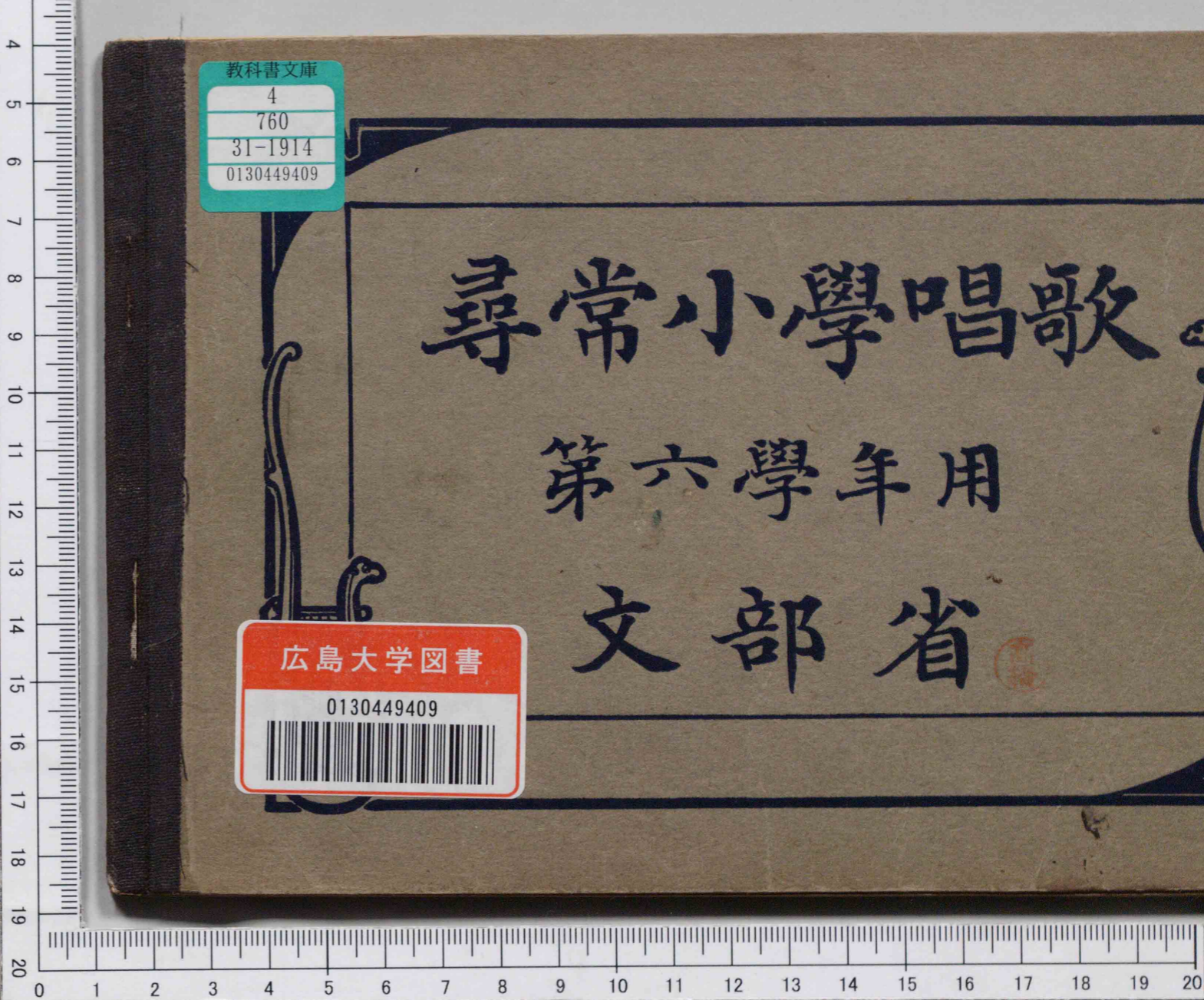
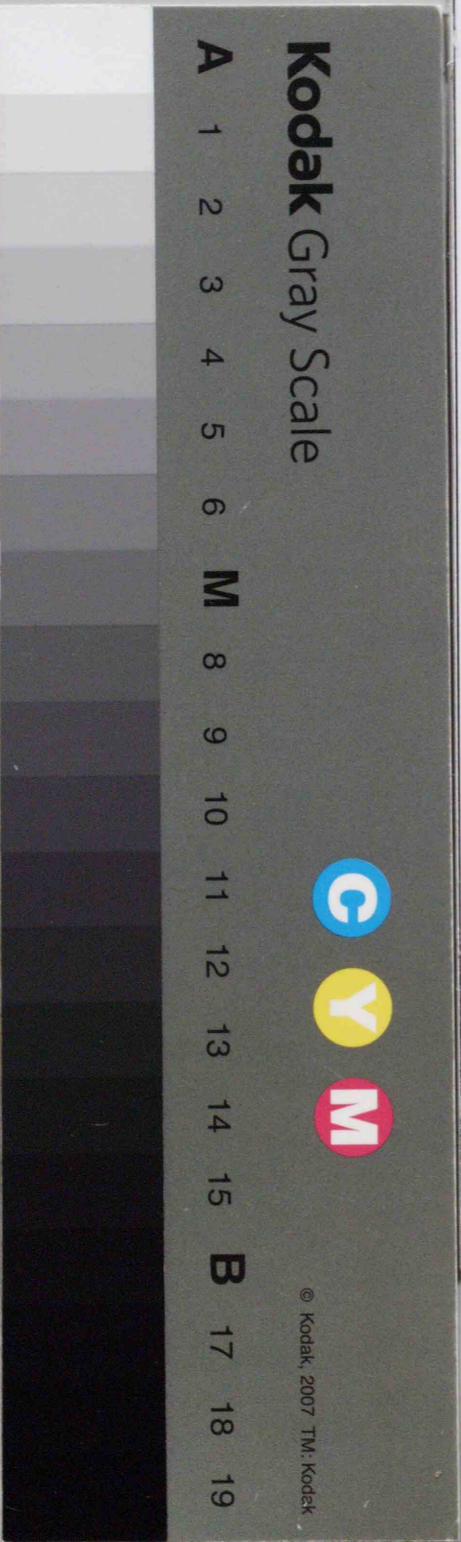
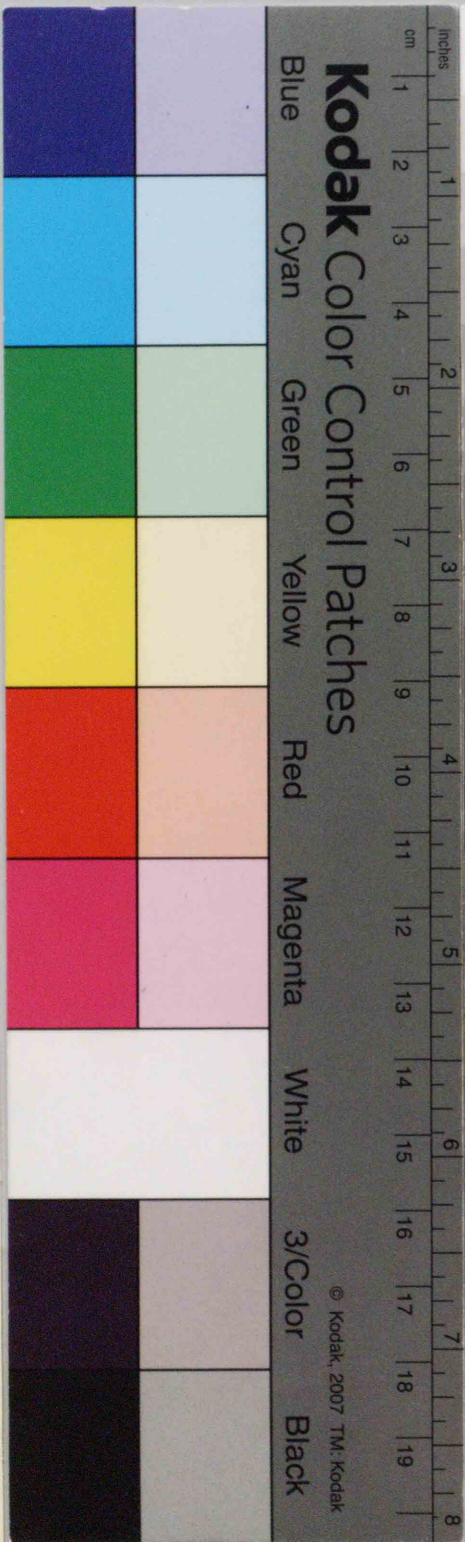


40348

教科書文庫

4
760
31-1914
01304 49409



教科書文庫
4
760
31-1914
0130449409

広島大学図書
0130449409

尋常小學唱歌
第六學年用
文部省



中央図書館

広島大学図書

0130449409



教科書文庫

4

760

31-1914

0130449409

尋常小學唱歌

第六學年用

文部省

広島大学図書

0130449409



緒 言

- 一 本書ハ本省内ニ設置セル小學校唱歌教科書編纂委員ヲシテ編纂セシメタルモノナリ。
- 二 本書ノ歌詞中、尋常小學讀本所載以外ノモノニ就キテハ、修身・國語・歴史・地理・理科・實業等諸種ノ方面ニ涉リテ適當ナル題材ヲ求メ、文體用語等ハ成ルベク讀本ト歩調ヲ一ニセンコトヲ期セリ。
- 三 本書ノ曲譜ハ排列上其ノ程度ニ就キテ多少難易ノ順ヲ追ハザルモノナキニアラズ。是其ノ歌詞ノ性質上已ムヲ得ザルニ出デタルナリ。

大正三年四月

文 部 省

目 次

一 明治天皇御製……………2	一一 同胞すべて六千萬……………28
二 兒島高德……………4	一二 四季の雨……………32
三 朧月夜……………8	一三 日本海海戦……………34
四 我は海の子……………10	一四 鎌倉……………38
五 故郷……………14	一五 新年……………42
六 出征兵士……………16	一六 國産の歌……………44
七 蓮池……………20	一七 夜の梅……………48
八 燈臺……………22	一八 天照大神……………50
九 秋……………24	一九 卒業の歌……………54
一〇 開校記念日……………26	

目 次

明治天皇御製

♩ = 92

明治天皇御製

mf

タカミ
ニめリ
チさへ
ミいか
ブをハ
ナちミ
ママガ
ノやノ
モあオ

アとヒ
ルのヤ
レとス
サこク
ママツ
ニがメ
リむタ
タしノ
コたト
オしヒ
ヨてテ
コしシ
ツはズ

ムむム
ナララ
ラるル
シなナ
トあメ
シこト
ナこツ
ハのノ
タもト

二

明治天皇御製

三

一、明治天皇御製

一、物學^{ものまな}ぶ道^{みち}に立つ子^こよ、おこたりに

まされる仇^{かた}はなしと知らなむ。

二、あやまちを諫^{いさ}めかはして親^{した}しむが、

まことの友^{とも}のこゝろなるらむ。

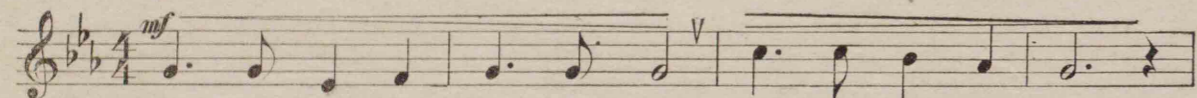
三、おのが身^みはかへり見^みずして人^{ひと}のため

つくすや人^{ひと}のつとめなるらむ。

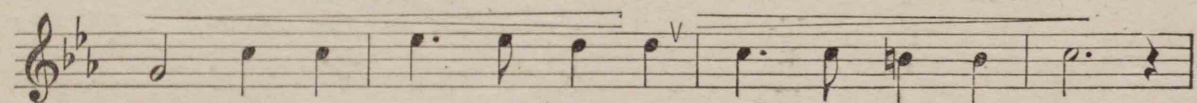
兒島高德

♩=80

兒島高德

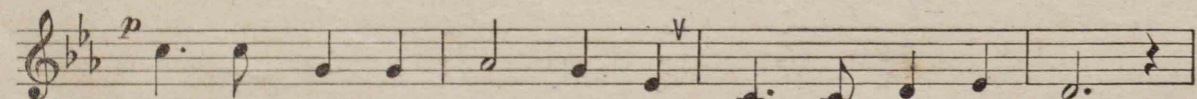


一 フ ナ サ カ ヤ マ ヤ ス ギ サ カ ト
二 み こ こ ろ な ら ぬ い で ま し の

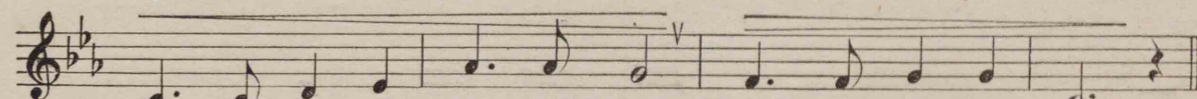


ミ ア ト シ タ ヒ テ キ ン ノ シ ャ ウ
み そ で つ ゆ け き あ さ と で に

四

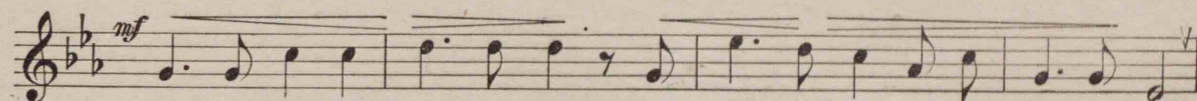


ビ チ ュ ウ ラ イ カ デ キ コ エ ン ト
す ん じ て 忍 ま す か し こ さ よ

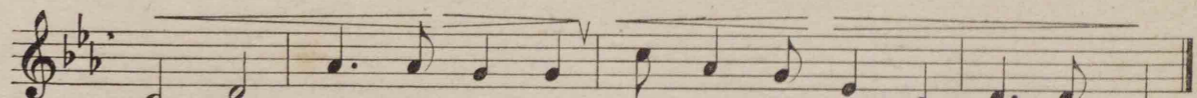


サ ク ラ ノ ミ キ ニ ジ フ ジ ノ シ
さ く ら の み き の じ ふ じ の し

兒島高德



テ ン コ ウ セ ン ラ ム ナ シ ウ ス ル ナ カ レ
- - - - -



ト キ ハ ン レ イ ナ キ ニ シ モ ア ラ ズ
- - - - -

五

二、兒島高德

一、船坂山や杉坂と

御あと慕ひて院の庄

微衷をいかで聞えんと、

櫻の幹に十字の詩。

「天勾踐を空しうする莫れ。

時范蠡無きにしも非ず。」

二、御心ならぬいでましの

御袖露けき朝戸出に、

誦じて笑ますかしこさよ、

櫻の幹の十字の詩。

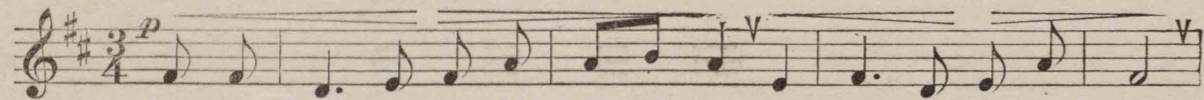
「天勾踐を空しうする莫れ。

時范蠡無きにしも非ず。」

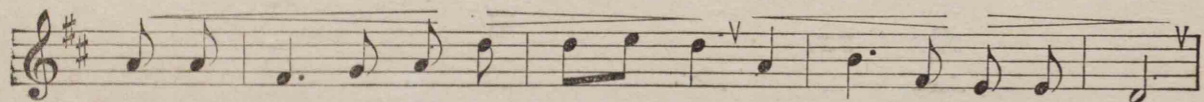
朧 月 夜

♩=72

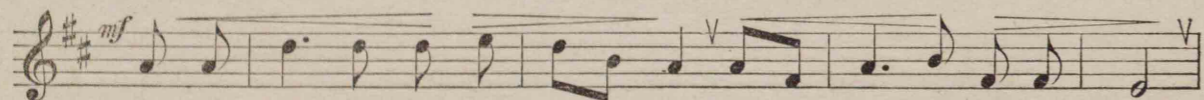
朧
月
夜



一 ナ ノ ハ ナ バ タ ケ ー ニ イ リ ヒ ウ ス レ
二 さ と わ の ほ か げ ー も も り の い ろ も

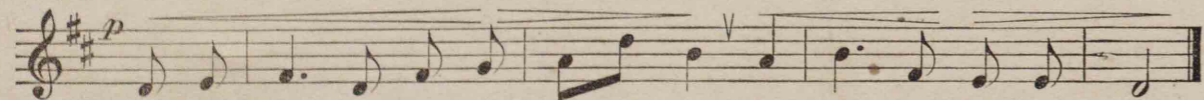


ミ ツ タ ス ヤ マ ノ ー ハ カ ス ミ フ カ シ
た な か の こ み ち ー を た ど る ひ と も



ハ ル カ ゼ ソ ヨ フ ー ク ソ ー ラ ヲ ミ レ バ
か は づ の な く ね ー も か ー ね の お と も

ス



ユ フ ズ キ カ カ リ ー テ ニ ホ ヒ ア ハ シ
さ な が ら か す め ー る お ぼ ろ づ き よ

朧
月
夜

三、朧 月 夜

一、菜の花畠に 入日薄れ、

見わたす山の端 霞ふかし。

春風そよふく 空を見れば、

夕月かゝりて にほひ淡し。

二、里わの火影も、森の色も、

田中の小路を たどる人も、

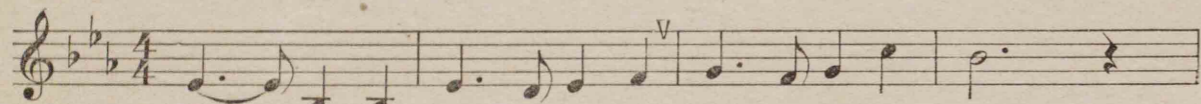
蛙のなくねも、かねの音も、

さながら霞める 朧月夜。

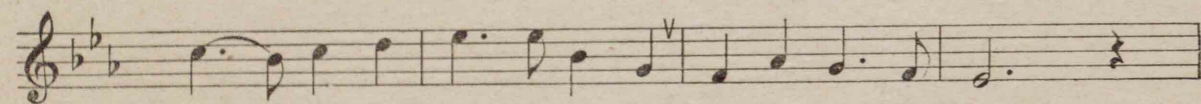
我は海の子

♩=126

我は海の子

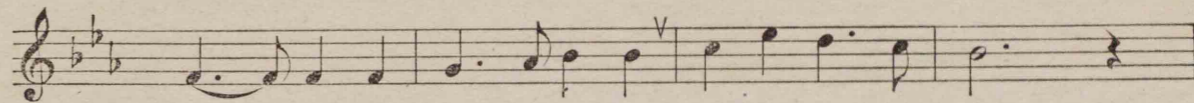


ノてニてルもテ
 ミシカリタンシ
 ナミノつへざダ
 ラあソやタうリ
 シゆいあきひノ
 コにクニニふヲ
 ノほッいコよネ
 ミーナか一だ一
 ウしハろコたブ
 ハてクのセにホ
 レれカよトみオ
 一ま一うク一デ
 ワうタやいなイ
 一二三四五六七

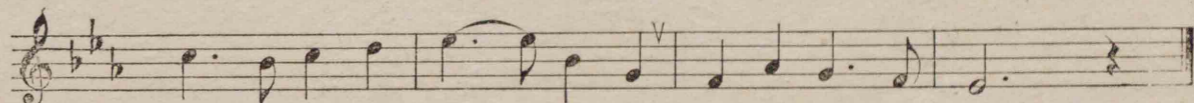


ニきりらリやミ
 ラきアくアんと
 バとりまナれノ
 ッたヲみヒそミ
 マうカナカおウ
 ノのノぬキレン
 べりナめタたハ
 ソも一だ一ロ
 イこハさカキヒ
 グをノてリばハ
 ワミンくヨラレ
 一ダ一ッた一
 サなフゆテキワ
 一二三四五六七

我は海の子



ソをヲこルもテ
 コきゼそタきミ
 ヤのカのミまク
 マみクみロツリ
 トうフうクたノ
 クるニニニニ
 ビくツろゼるン
 ナせ一ひ一ぐ一
 タよマチカあカ
 リりノろホキン
 ムんサひシまグ
 一ギもクみデ
 ケせナもフうイ
 一二三四五六七



レリクしニジニ
 ナけキろラカク
 カにハひガろノ
 ミリレはナドミ
 スなワにサおウ
 キとトルウレン
 シベクたドコラ
 一ら一れク一モ
 カわガなシおマ
 ツてキびハばハ
 ナひジそダラレ
 ガ一ミ一こ一
 ワすいあハおワ
 一二三四五六七

四、我は海の子

一、我は海の子白浪の

さわぐいそべの松原に、

煙たなびくとまやこそ

我がなつかしき住家なれ。

二、生れてしほに浴して

浪を子守の歌と聞き、

千里寄せくる海の氣を

吸ひてわらべとなりにつけり。

三、高く鼻つくいその香に

不斷の花のかをりあり。

なぎさの松に吹く風を

いみじき樂と我は聞く。

四、丈餘のろかい操りて

行手定めぬ浪まくら、

百尋千尋海の底

遊びなれたる庭廣し。

五、幾年こゝにきたへたる

鐵より堅きかひなあり。

吹く鹽風に黒みたる

ほだは赤銅さながらに。

六、浪にたいよふ冰山も

來らば來れ恐れんや。

海まき上ぐるたつまきも

起らば起れ驚かじ。

七、いで大船を乗出して

我は拾はん海の富。

いで軍艦に乘組みて

我は護らん海の國。

(尋常小學讀本卷十一所載)

故郷

♩=80

故郷

ウいコ サカコ ギにロ オいザ ヒまし シすヲ カちハ ノちタ ヤはシ マはテ
コつイ ブつツ ナがノ ツなヒ リしニ シやカ カとカ ノもヘ カがラ ハきン
ユあヤ — メめマ ハにハ イかア — マせヲ モにキ メつフ — ゲケル — リてサ — テもト
ワおミ スもヅ レひハ ガいき タづヨ キるキ フふフ ルるル サさサ トとト

五、故郷

一、兔追ひしかの山、
小鮒釣りしかの川、

夢は今もめぐりて、
忘れがたき故郷。

二、如何にいます父母、

恙なしや友がき、

雨に風につけても、
思ひいづる故郷。

三、こゝろざしをはたして、

いつの日にか歸らん、

山はあをき故郷、
水は清き故郷。

出征兵士

♩=112

出征兵士

コシシけバシ
 ガがレすらい
 ワわウたサへ
 ケてシをハク
 ユまマとハゆ
 クよサとチで
 トやイおチい
 ヤかシへバて
 ケくれカラさ
 ユゆウつサイ
 ヤばシにバみ
 ケらレヤラさ
 ユさウおサイ

ヲツハはバカ
 トとンれラつ
 ヒひワわサイ
 ハはゾととる
 ミひとウウク
 ズがトモモお
 ノねオいイみ
 ノのシノめバも
 チはイさらつ
 チはへをサつ
 ルるイをトし
 タたセヘウま
 イイツートげ
 オおシユいオは

出征兵士

シヘンすゲテに
 クとカケサレ
 ツいユカサこ
 ニをりにチは
 ニだヨろノけ
 クらトこ一さ
 ミかアこイな
 メばモをばキに
 トかレとタれ
 ツゆワこハか
 ノにミのノは
 ウさギヘウき
 ユくニ一ユウ
 ギいアイブゆ

ヲナシヤハレ
 ゲすタざレカ
 アしウイワわ
 ニにバセンの
 ヤひヲまナし
 ガまキキチを
 ワやテゆウを
 レもニにヲし
 マすモめキさ
 ホしトたテヤ
 ノにイのノし
 シまダにニま
 ウーウククさ
 カたキヤみミい

六、出征兵士

一、行けや行けや、とく行け、我が子。

老いたる父の望は一つ。

義勇の務御國に盡し、

孝子の譽我が家にあげよ。

二、さらば行くか、やよ待て、我が子。

老いたる母の願は一つ。

軍に行かばからだをいとへ。

彈丸に死すとも病に死すな。

三、うれしうれし、勇まし、うれし。

出征兵士の弟ぞ我は。

兄君我も後より行かん

兄弟共に敵をば討たん。

四、親に事へ弟を助け、

家を治めん、妹我は。

家の事をば心にかげず、

御國の爲に行きませいざや。

五、さらばさらば、父母、さらば。

弟さらば、妹さらば。

武勇のはたらき命さゝげて

御國の敵を討ちなん我は。

六、勇み勇みて、出で行く兵士。

はげましつゝも見送る一家。

勇氣は彼に、情は是に、

勇まし、やさし、をゝしの別。

(尋常小學讀本卷十一所載)

蓮池

♩=160

蓮池

一 マルハマキハヲソヨガセテ
 二 いけのほとりにたたずめば

アサカベワタルイケンオモ
 はなかおそふそでたもと

タツヤサザナミウキハヲコエテ
 そらはつきしろほのかにみえて

マロビマロブツユノタマ
 みぶにしろしはなはちす

アアスズシスズシアケボノ
 ああすすずしすずしゆふぐれ

七、蓮池

一、丸葉巻葉をそよがせて、
 朝風わたる池のおも。
 立つやさぐなみ、浮葉を越えて、
 まろびまろぶ露の玉。
 あゝ涼し涼し、
 あけぼの。

二、池のほとりにたゝずめば、

花の香おそふ袖袂。

空は月しろ、ほのかに見えて、

水に白し花蓮。

あゝ涼し涼し、

ゆふぐれ。

燈 臺

♩ = 104

燈 臺

ソシカ ララシ ニすコ ハやノ ツやミ キみサ ナよキ クにノ ホうイ シなハ サばホ へらノ ミとツ エほヘ スくニ

アふソ メなビ ノちユ ヨをル ユシト キめウ ノせダ ヨるイ アひイ ラカタ シリダ ノのキ ヨあた ハるカ ニをク

サしヨ カラル マすヨ クヤル アよカ ラすが ナがヤ ミラク ワあト ケらモ ユシシ クにビ フきコ ネえソ ハでハ

ナゆユ ニくキ ヲてカ カをフ シをフ ルしネ べふニ なるハ カあた チかフ ズしト カのキ トあマ レるモ ルをリ

八 燈 臺

一、空には月なく
雨の夜雪の夜
さかまく荒波
何をかしるべに
星さへ見えぬ
嵐の夜半に、
分けゆく船は、
舵柄取れる。

二、知らずや、闇夜に
船路を示せる
知らずや、夜すがら
光のあるを。
海原とほく
嵐に消えて、
ゆくてを教ふる
あかしのあるを。

三、かしこの岬の
巖の上
聳ゆる燈臺
頂高く
夜々輝く
行かふ船には
尊きまもり。

ともし火こそは、

秋

♩=160

秋

一 トンポトピカフノドケキーヒヨリ
 二 はやしわげゆきおちぐりーひろひ

ワラヂキヤハンニカロークイデタチ
 たにをわたりてきのーこかりゆき

ノベニヤマベニサザメキーアソープア
 きそふえものにこころはーいさーむあ

アコノーアキココチヨーヤー
 あこのーあきおもーしろやー

九、秋

一、蜻蛉とびかふのどけき日和

わらぢ脚絆に軽くいでたち

野べに山べにさゝめき遊ぶ。

あゝこの秋、心地よや。

二、林わけゆき、落栗ひろひ、

谷をあたりて草かりゆき、

きそふえものに心は勇む。

あゝこの秋、面白や。

開校記念日

♩=100

開校記念日

ノてノ
ウとビ
カふン
クはネ
ガイキ
フひノ
ヨのフ
カそケ
ニのキ
トんタ
ゴねデ
ヒきメ

ヲるデ
ヒくマ
ノひル
フどヘ
ケつか
ノにビ
シニタ
トこチ
シしビ
ケどタ
ラしモ
ヒとモ

チのク
ミちナ
リだギ
へもル
カとユ
ニのク
トどタ
ゴまカ
シきエ
トじズ
ルなシ
クおイ

ヨよヨ
サさウ
シシカ
ノれク
タうガ
ノすケ
キまユ
トすカ
マカサ
フよニ
ハよハ
イイト

二六

開校記念日

一〇、開校記念日

一、日毎に通ふ学校の

ひらけし年の今日の日を、

来る年ごとにかへりみて、

祝ふまとのの樂しさよ。

二、記念のその日祝ふとて、

年々ここに集ひ来る

同じき窓の友だちの、

いよ、數ますうれしさよ。

三、めでたき今日の記念日の

百度千度かへるまで、

礎かたくゆるぎなく、

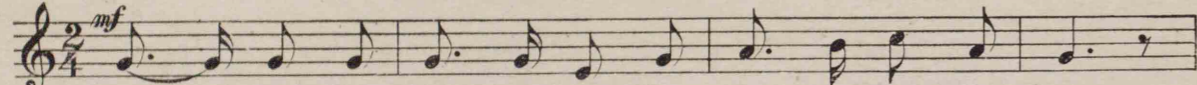
とはにさかゆけ、學校よ。

二七

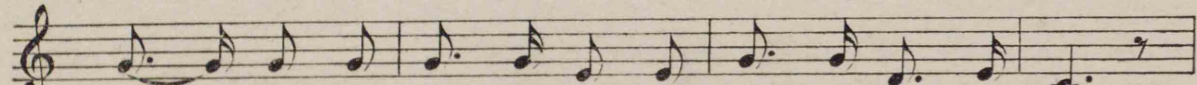
同胞すべて六千萬

♩=84

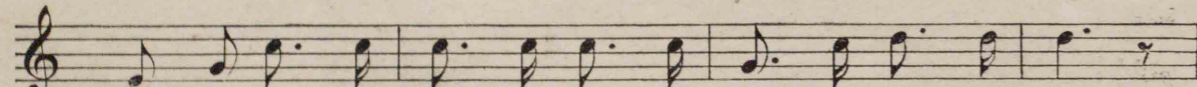
同胞すべて六千萬



一 二 三 四 五 六 七
 キカアみちとシ
 一 一 エフ ハウウ
 タみウほとやシ
 ハよノのウラン
 カはホクザヘノ
 ラる 一 一 一 ト
 フけマにイワク
 トキレとノの 一
 チむクのチヤ
 シカハラウんレ
 マしシげチよナ
 ヨよホふトくり
 リリコはりはト



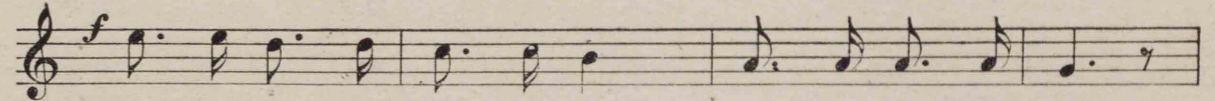
一 二 三 四 五 六 七
 ミくチビアかケ
 一 一 一 タら 一 ウ
 ナしルげメがい
 ミんノのイるク
 タぶクちコわヨ
 イんニなコレク
 ワはノしんらゴ
 ン 一 一 一 ノの 一
 ハさナノスカノ
 ウだニもキたり
 コまオヤチのタ
 タリヒまヌウマ
 ウてテもクヘヒ



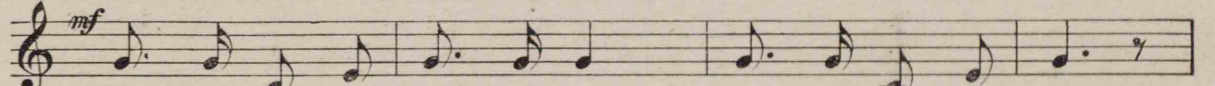
一 二 三 四 五 六 七
 テばレヤケとセ
 ウんイウシラ 一
 セセギニコはレ
 ンいハウクウ
 はいハげイぶケ
 チつヤふヲんイ
 タげクのイめエ
 ウい 一 一 一 一 一
 オウカはサセカ
 シゴヲツんんク
 ナきビたせしコ
 ベなトつんんソ
 テキモに本のト

二八

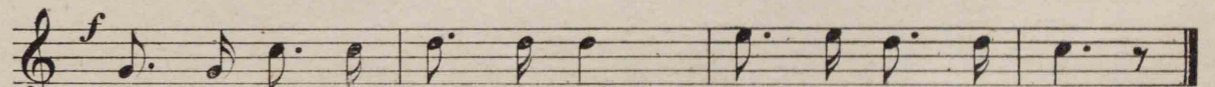
同胞すべて六千萬



一 二 三 四 五 六 七
 ワわタみんにホ
 ガがタクキンシ
 オくへにシむン
 ホウシのノはノ
 ギしソとアおセ
 ミつノみともウ
 ノのナをニキヨ
 チおクおカにカ
 スほンコンほシ
 クみシさがんコ
 ニいコンミニシ
 トツクとテくヤ



一 二 三 四 五 六 七
 アあソキニしオ
 サませんツヤホ
 ヒねんベシウミ
 ノキノんかコ
 ミヒキドゲント
 ハかフリツノ
 タリウくボろリ
 ヒあツたユイタ
 ルふギウルフ
 かがツみミにト
 へみギなナしビ
 スるテキキテテ



ド 一 一 一 一 一
 ウ 一 一 一 一 一
 バ 一 一 一 一 一
 ウ 一 一 一 一 一
 ス 一 一 一 一 一
 ベ 一 一 一 一 一
 テ 一 一 一 一 一
 ロ 一 一 一 一 一
 グ 一 一 一 一 一
 セ 一 一 一 一 一
 シ 一 一 一 一 一
 マ 一 一 一 一 一

二九

一一、同胞すべて六千萬

一、北は樺太千島より南臺灣澎湖島。
 朝鮮八道おしなべて我が大君の食す國と
 朝日の御旗ひるがへす同胞すべて六千萬。

二、神代はるけき昔より君臣分は定まりて

萬世一系動きなき我が皇室の大みいつ、
 あまねき光仰ぎ見る同胞すべて六千萬。

三、武勇のほまれ細戈千足の國の名に負ひて

禮儀は早く唐人も稱へし其の名君子國。
 祖先の遺風つきくって同胞すべて六千萬。

四、瑞穂の國と農業は開けぬ地なし野も山も。

商工業の發達に皇國の富を起さんと
 勤勉努力たゆみなき同胞すべて六千萬。

五、智は東西の長を採り文明古今の粹を抜く。

建國以來三千年歴史の跡にかんがみて
 日進月歩ゆるみなき同胞すべて六千萬。

六、東洋平和の天職はかゝる我等の肩の上。

東方文明先進の任務は重き日本國、
 上下心を一にして同胞すべて六千萬。

七、修身の徳是なりと教育勅語のり給ひ

戦後經營かくこそと戊申の詔書かしこしや。
 大みことのりたふとびて同胞すべて六千萬。

(尋常小學讀本卷十一所載)

一、四季の雨

一、降るとも見えじ春の雨

水に輪をかく波なくば、
けふるとばかり思はせて。

降るとも見えじ春の雨

二、俄に過ぐる夏の雨

物ほし竿に白露を
なごりとしばし走らせて。

俄に過ぐる夏の雨

三、をりくそぐ秋の雨

木の葉木の實を野に山に
色様々にそめなして。

をりくそぐ秋の雨

四、聞くだに寒き冬の雨

窓の小笹にさやくと
更行く夜半をおとづれて。

聞くだに寒き冬の雨

四季の雨

♩=69

四季の雨

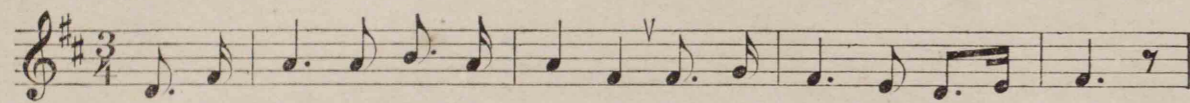
メめメめ
— — — —
アアアア
ノののの
ルつきゆ
ハなアふ
シるガキ
エぐソむ
— — — —
ミソソ
モにりに
トかチだ
ルぱりく
フにチキ
— — — —
バをにと
クゆマイヤ
ナつヤ
— — — —
ミラニヤ
ナしノキ
クにチに
カをミキ
チーノ
ワざコを
ニしハの
ゾほノど
ミのヨキ
— — — —
テてテて
— — シー
セセナレ
ハラ一づ
モシメト
オはソお
リしニを
カばマは
— — — —
バシザ
トとマ
ルリサ
ブゴロけ
ケナイふ
— — — —
メめメめ
— — — —
アアアア
ノののの
ルつきゆ
ハなアふ
シるガキ
エぐソむ
— — — —
ミソソ
モにりに
トかチだ
ルぱりく
フにチキ

三三

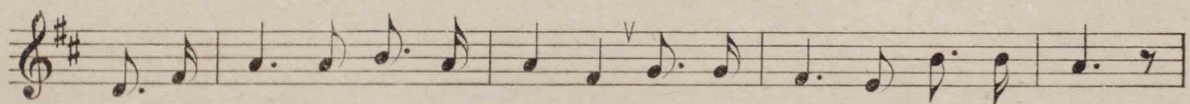
日本海海戦

♩=92

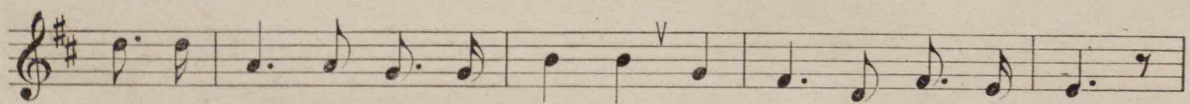
日本海海戦



一 テ キ カ ン ミ エ タ リ チ カ ヅ キ タ ー リ
 二 し ゅ り よ く ー か ん た い ま ー へ を お さ へ
 三 ト ウ テ ン ア カ ラ ミ ヨ ー キ リ ハ レ テ



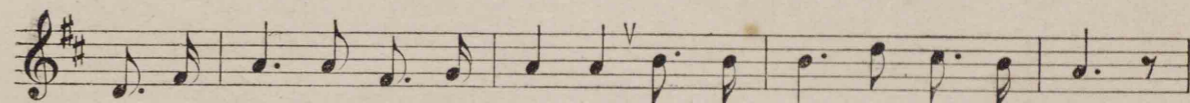
ミ ク ニ ノ コ ウ ハ イ タ ダ コ ノ イ ツ キ ヨ
 じ ゅ ん や う か ん た い う し ろ に せ ま り
 キ ヨ ク ジ ツ カ ガ ヤ ク ニ ツ ボ ン カ イ ジ ヤ ウ



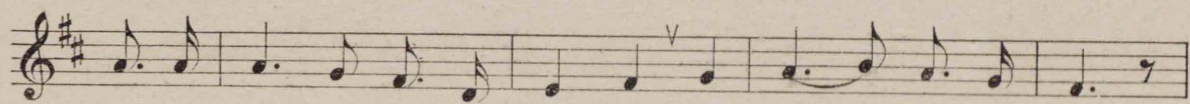
カ ク キ ン フ ン レ イ ド リ ヨ ク セ ヨ ト
 ふ く ろ の ね す み と か こ み う て ば
 イ マ ハ ヤ ノ ガ ル ル ス ベ モ ナ ク テ

三四

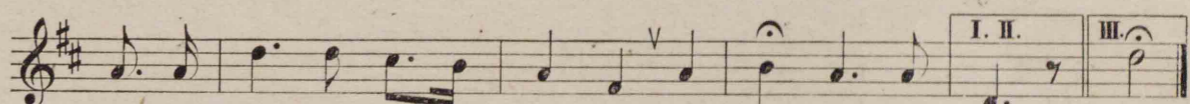
日本海海戦



キ カ ン ノ ホ バ シ ラ シ ン ガ ウ ア ガ ル
 み る み る て き か ん み ー だ れ ち る を
 ウ タ レ テ シ ヅ ム モ ク ダ ル モ ア ー リ



ミ ツ ラ ハ ハ ル レ ド カ ゼ ー タ チ テ
 す ゐ ら い て い た い く ち ー く た い
 テ キ コ ク カ ン タ イ ゼ ン ー メ ツ ス



ツ シ マ ノ オ ー キ ニ ナ ミ タ カ シ
 の が し は せ ー じ と お ひ て う つ
 テ イ コ ク バ ン ザ イ バ ン バ ン ザ イ

三五

一三、日本海海戦

一、「敵艦見えたり、近づきたり。

皇國の興廢たゞ此の一擧。

各員奮勵努力せよ。」と

旗艦のほばしら信號揚る。

みそらは晴るれど風立ちて、

對馬の沖に浪高し。

二、主力艦隊前を抑へ、

巡洋艦隊後に迫り、

囊の鼠と圍み撃てば、

見るく敵艦亂れ散るを、

水雷艇隊驅逐隊

逃しはせじと追ひて撃つ。

三、東天赤らみ夜霧霽れて、

旭日かゞやく日本海上、

いまはや遁るゝすべもなく、

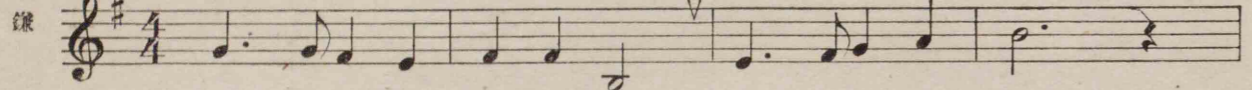
撃たれて沈むも降るもあり、

敵國艦隊全滅す。

帝國萬歲萬々歲。

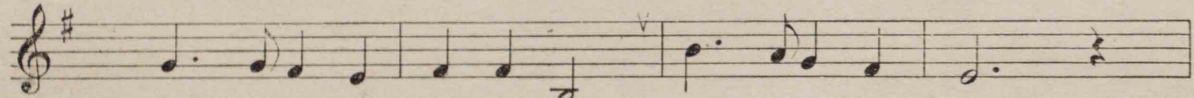
鎌 倉

♩=120

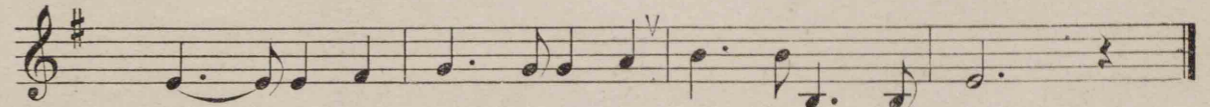


鎌
倉

とばテのデはネの
タけミしソてクラ
ヅゆニはノでヤで
ソえギざヒウチる
イこミきママシふ
ノかベのノにキが
マざマしウガん
ハじハいダぐナる
ガクノヤヤらハう
リらヒるミクシヤ
チく一ぼカまキン
シゴユのワカレけ
一二三四五六七八



ノくバふシにテに
ウかケてへみニせ
ヤちユイカラニか
イうギほりうメつ
メだスおクみユま
キのラきキのテき
サンタカマこべか
ガのシたダみスタ
ランノにヲぬウン
ムわキリノせバも
ナせ一だヅきウン
イはユヒシツコさ
一二三四五六七八



鎌
倉

ウすロとツしヌん
ヂマシあツベシら
ンシャのビぬムる
セはンよノきケも
コおオよシわココ
シつ一きヲだハヤ
ゼぶノ一トみカと
ウいウほ一一一
トだグとヒなハお
ギンヤシのウの
ルのマばせんユし
一ざチはへふイか
ツろハとカヒエむ
一二三四五六七八

一四、鎌倉

一、七里が濱のいそ傳ひ、

稲村が崎名將の

劔投ぜし古戰場。

二、極樂寺坂越え行けば、

長谷觀音の堂近く

露坐の大佛おはします。

三、由比の濱べを右に見て

雪の下村過行けば、

八幡宮の御社。

四、上るや石のきざはしの

左に高さ大銀杏、

問はばや遠き世々の跡。

五、若宮堂の舞の袖、

しづのをだまきくりかへし、

かへせし人をしのびつゝ。

六、鎌倉宮にまうでては、

盡させぬ親王のみうらみに、

悲憤の涙わきぬべし。

七、歴史は長き七百年、

興亡すべてゆめに似て、

英雄墓はこけ蒸しぬ。

八、建長圓覺古寺の

山門高き松風に、

昔の音やこもるらん。

(尋常小學讀本卷十二所載)

一五、新年

一、鶏の八聲に夜はあけて、
神代ながらの今朝の空。

緑色こき二本松に
はゆる旭の旗の影。

二、昆布伊勢えび鏡餅、

嘉例めでたき床かざり。

窓をもれくる晨の風に
かをりたゞよふ鉢の梅。

三、手鞠追羽子いかのぼり、

思ひくの遊して

わらひ興する童の聲も、
まださ春めく庭の面。

新年

♩=152

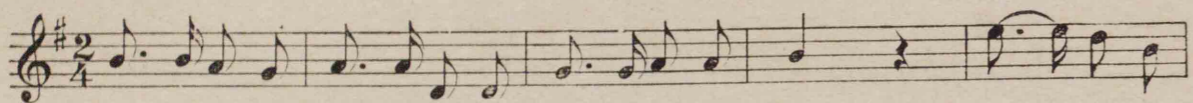
新 年

ト リ ノ ヤ コ エ ニ ヨ ハ ア ケ テ
 こ り ん ぶ い セ え び か が み も ち
 テ マ リ オ ヒ ハ ゴ イ カ ノ ボ リ
 カ ミ ヨ ナ ガ ラ ノ ケ サ ノ ソ ラ
 か れ い め で た き と こ か ん ざ り
 オ モ ヒ オ モ ヒ ヨ ヲ ゼ ヲ ア シ ハ ノ シ テ
 ミ ド リ イ も ロ コ キ フ タ モ ト マ ツ ニ
 ま ど り も キ ヲ れ く る あ し た の か こ せ せ に
 ワ ラ ヒ キ ヲ ヲ れ ズ ル ソ ラ ハ ノ カ ゲ
 ハ ユ ル ア サ ヒ ノ ハ タ ノ カ ゲ
 か を り り た ハ サ ヒ ノ ハ タ ノ カ ゲ
 マ ダ タ キ キ ハ ル サ ヒ ノ ハ タ ノ カ ゲ

國産の歌

♩=100

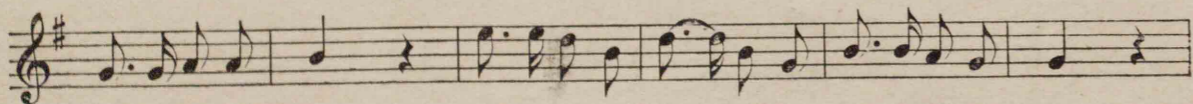
國産の歌



キードはトたキ
ルいレやーリセ
一かーいウーウ
フぎホセキアバ
ノくうらにハにロ
クろウくニたシ
コひノこちくム
イこほんとな
テモオゼサセハ
ンーリはーはノ
ボのパとノあチ
ツみフぎノー
ニうユむモるス
イのケとリのク
ダうイめおもゴ
がばーメキウ
ワシミこキヤユ
一三四五六七



ウなカふかん
タみサうりづン
シヨとコしキシネ
ハのニんのはツ
ナンシマキユ
キげガランツ
オむヒのグシユ
ニのクとシキハ
クうナウトヤト
コさリやメマチ
チイギ(ジツツ
ハカカみハさイ
フマウかんづト
シゴロをサウト
クまんづシヨ
ロさタしニキイ
一三四五六七



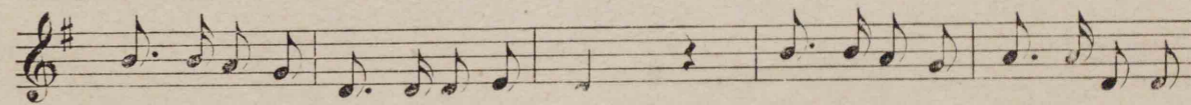
ンのハすリハ
サクンだタメヨ
フンザいレづノ
ツんきフひマ
シゼサはシあい
ハはテのチカノ
ンんせしナをン
ーハノカリ
ケリアむソたヒ
ツんーキクエリ
ミシナさるン
ハたシひー
フマアチブクセ
ゾリシどモリリ
チたツれキめカ
せしマあザまバ
ハラシにセシス
アざニナイわイ
一三四五六七

四四

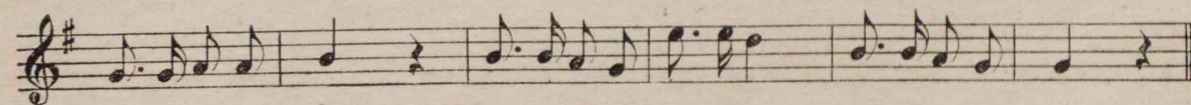
國産の歌



ニにクんいイ
カとルさダカカ
ーーううはー
ホこフヤゾなセ
トクシんノのシ
ウなダひクウウ
チろタつかばツ
ツこビしんつヒ
イとおゆサシア
ノはガのニるニ
ウはんにミひガ
ダおサむトむタ
イーはンー
カやノとネいム
クんウいんかウ
ホさトキキセイ
一三四五六七



ニんノまハのフ
タわウたカふダ
ライスいシキン
アたまさいまさ
ンとタのキしヨ
セふノがクダイ
ウらー一ギヨ
テかソなフトイ
ドのノはノリウ
ウしクいクけチ
ナヨイだろろシ
ンそドいクどナ
シキサセホとミ
クキルのハーク
ボカルーシにコ
ンだらふーいク
ナなシげセわカ
一三四五六七



ニリルしんてシ
クあいるヒにカ
シしチじツリセ
マヤマユシコヤ
ウは十いユほフ
キめチにノのチ
ホらがんりふミ
オいウけおげト
ンのチキヘーノ
サリマなタコニ
ンこーみアが一
テキヤうハわク
テリハマルもツ
リよウんナラウツ
ハこカぐマこミ
ハいわてやいダ
クたクまトせハ
一三四五六七

四五

一六、國産の歌

- 一、我が大日本帝國の
沖繩諸島合せてぞ、
北海道の一廳と
朝鮮新にかりて
古き六十八國に、
府は三つ縣は四十三。
外に南北新領土。
天産多きうまし國。
- 二、四方の海の底廣く、
無限の富を藏したり。
山野おほはぬ處なく、
樺太臺灣太古より
魚介さまへ海草の
又森林は全國の
殊に名高き木曾吉野、
きこりの入らぬ林あり、
- 三、三池夕張大の浦
掘れど炭礦限りなく
東に小坂西別子
足尾併せて三山は
銅の産額おびたゞし。
古く知らるゝ佐渡生野、
山をうがちて山を鑄る。
其の他無数の礦坑は

四、米と麥とは全國に

農産收入何あれど、
生絲は無二の輸出品。
長野埼玉さて群馬、

製茶は静岡三重京都。
小さき蟲の吐出す
養蠶業の盛大は、
海なき縣に著し。

五、絹織物の産地には

群馬の桐生伊勢崎も
近年とみに産額の
福井石川富山なる

京都西陣始とし、
古く其の名を知られたり
増大せしは北陸の
羽二重織の輸出品。

六、焼物類は瀬戸九谷

漆器は静岡輪島塗
世界無比なる七寶の
とき出し蒔繪の精巧も

有田清水薩摩焼。
黒江高岡會津塗。
名は海外にとゞろけり、
我が工業のほこりにて。

七、中國筋の花筵

輸出年々増すばかり。
有無互に相通じ
いよく産業勵みつゝ

紡績絲とまつちとは
千里比隣の今の世は、
世界各國皆市場。
國の富をばふやせかし。

(尋常小學讀本卷十二所載)

夜の梅

♩=152

夜の梅

一 コズエマバラニサキソメシ
二 はなもさえだもそのまに

ハナハサヤカニミエネドモ
うつるすみゑのかみしやうじ

ヨルモカクレヌカニメデテ
かをりゆかしくおもへども

マドハトザサヌヤミノウメ
まどはひらかぬつきのおうめ

一七、夜の梅

一、梢まばらに咲初めし

花はさやかに見えねども、

夜もかくれぬ香にめでて、

窓はとざさぬ闇の梅。

二、花も小枝もその儘に

うつる墨畫の紙障子。

かをりゆかしく思へども、

窓は開かぬ月の梅。

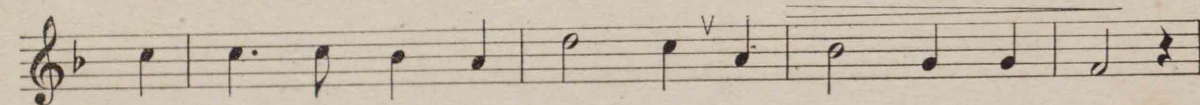
天 照 大 神

♩=100

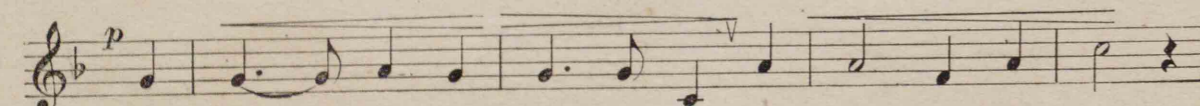
天照大神



一 ト ヨ ア シ ハ ラ ノ ナ カ ツ ク ニ
二 あ め の つ く だ に み た つ く り
三 モ ウ コ ノ ア タ ノ ヨ セ シ ヒ モ



ス メ ミ マ ユ キ テ シ ロ シ メ セ
い み は た ど の に み ぞ お ら せ
カ ミ カ ゼ コ ソ ハ オ コ リ シ カ



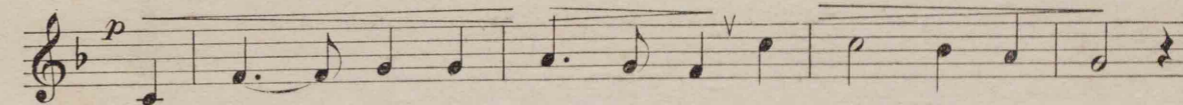
ア マ ツ ヒ ツ ギ ハ ア メ ツ チ ト
た ふ と き み み の さ き だ ち て
こ と ク ニ マ デ モ コ ト ム ケ テ

五〇

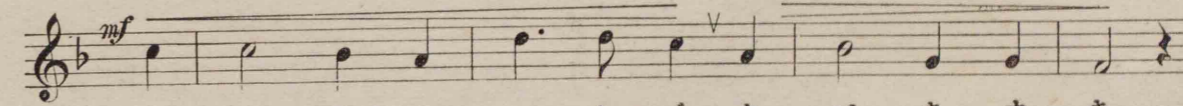
天照大神



キ ハ マ リ ナ シ ト ク ニ ノ モ ト
あ を ひ と ぐ さ の な り は ひ に
カ ガ ヤ ク ミ イ ツ マ ノ ア タ リ



サ ダ メ タ マ ヒ シ ア マ テ ラ ス
い そ し み ま し し あ ま て ら す
イ マ モ ム カ シ モ ア マ テ ラ ス



カ ミ ノ ミ コ ト ゴ ウ ゴ キ ナ キ
か み の め ぐ み ぞ か ぎ り な き
カ ミ ノ マ モ リ ゴ イ チ ジ ル キ

五一

一八 天照大神

一、豊葦原の中つ國

皇孫行きて知ろしめせ。

天つ日嗣は天地と

窮りなし。』と國の基

定め給ひし天照す

神の御言ぞ動なき。

二、天の營田に御田作り、

齋服殿に御衣織らせ、

尊き御身のさきだちて

營田リ田ノコト
紐地耕田

蒼生(一生)

蒼生のなりはひに

いそしみまし、天照す

神の恵ぞ限なき。

三、蒙古の敵の寄せし日も

神風こそは起りしか。

こと國までもことむけて

かゝやく御稜威まのあたり。

今もむかしも天照す

神の護ぞいちじるき。

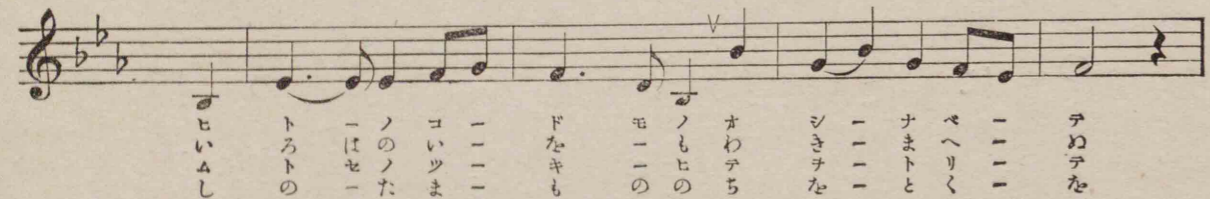
卒業の歌

♩=104

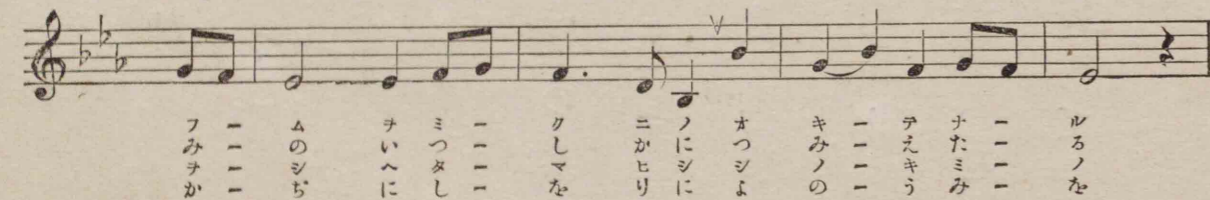
卒業の歌



ウレシシヤウレシヤナ



ヒイタノコトナモオシキナマヘテ



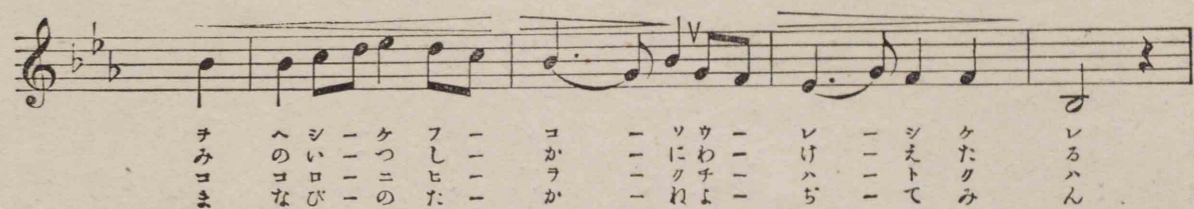
フミチノチミクシカヒリオツシヨキミノテスキナル

五四

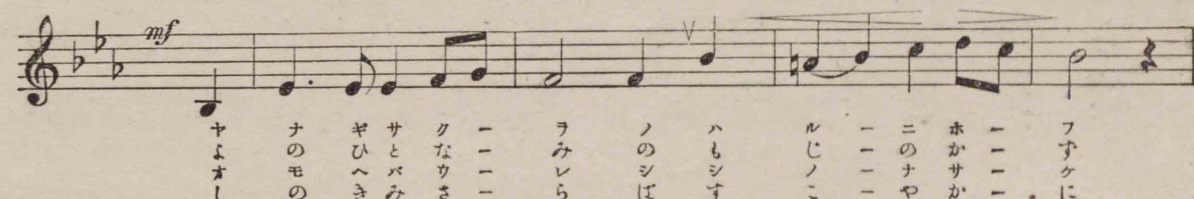


マニミワナシチナヒキテミガナウチシクカノモバムシイナトシカハセサテタチリソカバシガキ

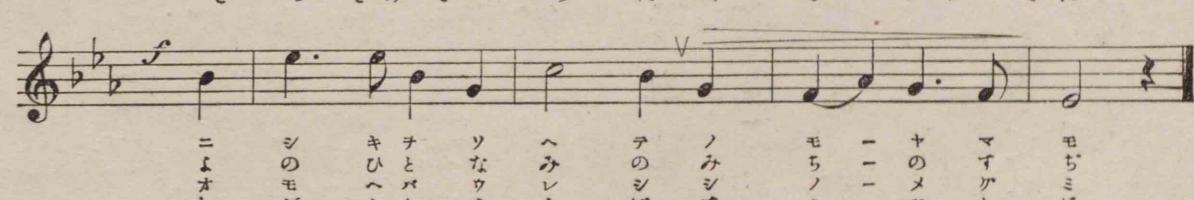
卒業の歌



チミコミヘノコナシイロビケツニのフシヒタコカラカ

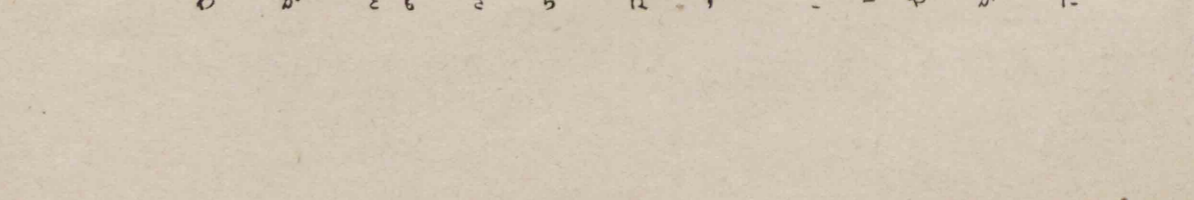


ヤオシナノモギヒヘキサトバミクナウサラミレラ



ニヨオワシノモガキヒヘトチナバモソナウサヘミレラ

五五



テノシバノミシスモチノコチノメヤマイクカモチミに

一九 卒業の歌

一、うれし、うれしや、うれしやな。
 人の子どものおしなべて
 ふむを御國のおきてなる。
 學びの道の六年をば
 卒へし今日こそうれしけれ。
 柳櫻の春にほふ
 錦をそへて野も山も。

二、うれし、うれしや、うれしやな。
 いろはのいをもわきまへぬ
 身のいつしかに積み得たる、
 西も東も知らざりし
 身のいつしかに分けえたる、
 世の人並の文字の數
 世の人並の道の筋。

三、うれし、うれしや、うれしやな。
 六年の月日手を取りて
 教へ給ひし師の君の
 導きなくばいかで我が
 心に開く、智は徳は。
 思へばうれし師の情
 思へばうれし師の恵

四、うれし、うれしや、うれしやな。
 師の賜物の智を徳を
 かぢにしをりに世の海を
 わたりて行かん、尙高き
 學びの高嶺よぢて見ん。
 師の君さらば健かに、
 我が友さらば健かに。

發行所

會社
株式
國定教科書共同販賣所
東京市日本橋區新右衛門町十六番地

印刷所

博文館印刷所
東京市小石川區久堅町百〇八番地

印刷者

荻原勝次郎
東京市小石川區久堅町百〇八番地



發行者

代表者 大橋新太郎
會社 國定教科書共同販賣所
株式 東京市日本橋區新右衛門町十六番地

著作權者

文部省

大正三年六月十八日發行

大正三年六月十五日印刷

定價金六錢

尋常小學唱歌第六學年用

1907.7.17

広島大学図書

0130449409

